



菅本真司の生き様

討議資料

第一章：菅本真司の生い立ち（鹿角に来るまで）

● 1985(S. 60)年 7月 29日広島県尾道市で生まれ、以後広島市で育つ。

古田幼稚園時代

負けず嫌い

同じ県公舎に住む幼稚園～小学生の10名ほどのグループの最年少で、野球やドッジボールで遊んでいました。基本的に負けず嫌いで、年長者と互角に競おうとしていつも負け、悔しくてよく泣いていました。なにか決めるとき自分の意見が通らないと、「なぜ?」とよく質問していました。たいてい「年長者の言うことが正しいから」という説明だったのですが、とても不満で、本当に正しいことであれば、その説明にみんなが納得できるはずだと信じていました。



求める人生が始まりました。

※自分はたまたま負けず嫌いで、悔しさから学び、なにクソ!とバネにできましたが、今から思うと、考えに偏屈な部分も多かったです。だからこそ、今の子供達には、一人一人の個性を互いに認めあう環境で、持ち味を伸ばす教育を受けて欲しいと強く思います。

修道中学校(男子校)時代 チームプレーを学ぶ

親の勧めで中学受験。修道中学校に首席入学し、書道部とサッカー部に所属しました。部活に打ち込む日々で、全日本学生選抜書道展学会大賞、サッカーは広島市総体2位、県総体3位という結果でした。サッカー部では、自分の考え方が大きく変わった経験がありました。当時、試合中に相手にボールを奪われた際、チーム内では「ボールを取られたチームメイトが悪い」という雰囲気がありました。1学年で30人近く部員がいたことも影響していると思いますが、ドリブルで突破できる人間が評価され、すぐボールを取られる人間は見下される雰囲気がありました。ある時、新しく担当になった顧問の先生がその態度に激しく喝をいれたのです。

「いいかお前ら!サッカーは個人プレーじゃない!チームプレーだ!なぜ、困ってるチームメイトを見て、周囲のお前らは突っ立ってるんだ!なぜ、チームメイトがパスを出しやすいところに動いて、”ここにパス出せ!”と声かけしないんだ!ボールを取られたのはチームメイトのせいじゃない!突っ立って何もしないお前らのせいだ!ボールを取られたチームメイトを非難するなんて、チームの人間として根本的に間違っている!それが分からないやつは、今すぐここから出ていけ!」

以来、チームは大いに団結し、日に日に強くなり、最高に充実した毎日を送りました。チームプレーとはどうあるべきか。今でも私が大切にしている根本的な考え方です。



広島市立古田小学校時代

好奇心旺盛

私が入学した小学校は、全校生徒が1500人ほどのマンモス校で、1学年で7クラスありました。好奇心が旺盛なほうで、アリの味を確かめたくて、実際に食べてみたりする子でした。クワガタ、樹木、魚といった自然と、電車、飛行機、ロケット、船といった乗り物が好きな子供でした。しかし、学校の勉強はあまりせず、授業中も別のことを考えていることが多く、宿題は嫌いで、成績も振るわなかったので、友人から「バカの笹本」と呼ばれました。高学年の時、将来の夢はパイロットだったのですが、親から「飛行機の図鑑を見るより、勉強したほうがパイロットに近づくよ」と言われ、目標ができたことで、勉強に打ち込むようになりました。成績が上がると、周囲の自分に対する評価が変わり、今度は、「笹本は秀才」と言われることが多くなりました。「多くの方は、自分の本質を見て評価していない。他人に認められるには、分かりやすく見える形で結果を出すことが大切だ」と、子供ながらに肌で感じました。それ以降、常に結果を



修道高等学校時代

たくさんの学び

中高一貫校のためそのまま高校に進学しました。書道部と登山部に所属し、登山競技では高2の時に、茨城インターハイで準優勝でした。高3でも長崎インターハイに出場し、キャプテンを務めたものの、結果は7位。悔しい結果でしたが、リーダーシップやチームづくりについて、たくさんの学びがあり、大きな糧となりました。



東京工業大学工学部・大学院理工学研究科 (化学工学専攻)時代

挫折と新たな人生観

大学には現役合格し、すぐ人力飛行機サークルに入りました。テレビで見た琵琶湖鳥人間コンテストにあこがれ、入学前からサークルの担当者にメールで連絡を取っていました。自分の目標通り、パイロットにも選ばれ、鳥人間コンテスト出場も、離陸後に風に流され護岸に墜落。踵(かかと)を粉碎骨折して手術と1ヶ月半入院という結果でした。悔しさと情けなさに打ちひしがれる日々でしたが、多くの方に励まし支えられたことで、人生観が変わりました。人生、結果が全てでないということが身にしみました。結果だけを追い求める価値観は、決して幸福で豊かな人生につながるとは限らないと納得しました。しかし一方で、「幸福とはなんだろう」と、常に自問自答するようになりました。大学院では、1年間フィンランドに交換留学しました。学力や幸福度が世界的に高く、実際に勉強しながら暮らしてみたいと思ったのがきっかけです。冬は1日中暗く、常に-10℃前後が続く厳しい気候ですが、教育、福祉が充実し、ITが社会に浸透して質が高く、シンプルで実用的な社会システムで、学ぶ事が多かったです。特にIT技術の社会への浸透に関しては“日本はかなり遅れている”と肌で感じました。



東洋エンジニアリング(株)時代

世界をフィールドに、そして鹿角に



専門を活かしつつ、働きながら世界を渡り歩けることに魅力を感じて、千葉に本社を置く化学プラントエンジニアリング会社に入社しました。取り扱っているものは、石油化学コンビナートにある化学工場を思い浮かべてもらえば良いかと思います。この会社は、設計・調達・建設・試運転までを一貫して請け負う能力があり、私は工事部で施工管理を担当しておりました。化学プラントの建設には、技術者、労働者、その他様々な形で毎日何千人(規模によっては何万人)もの人間が出入りします。仕事は受注額が数百～数千億円で、個々の機器やシステムの理解といった技術的能力だけでなく、契約関係、海外で多種多様な人間をまとめるマネジメント能力やコミュニケーション能力などの、総合力が求められました。在籍した7年のうち、約6年間は海外(ベネズエラ、アメリカ、インドネシア)で過ごしました。気候も言葉も宗教も文化も生活水準も、国によって何から何まで異なる環境で、刺激的な毎日でした。一方で、帰国休暇等で久しぶりに見る日本は、途上国よりはるかに豊かで安全なのに、全体的に活気が感じられませんでした。悲しかったし危機感すら覚えました。人生一度きり。自分が人生で成し遂げたいものを追いかけるため、会社を辞めました。そして、東京の社会人塾である“一進塾”に通っていたとき、たまたま、湯瀬ホテルの社長が講師として登壇。手がけてこられた旅館の経営再生を通じた地域再生の挑戦に感銘を受け、門を叩き、私の鹿角での生活が始まることとなります。2018年秋のことでした。(つづく)

笹本真司後援会

鹿角市八幡平字湯瀬古館13-1